
あと一分の猶予を

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あと一分の猶予を

【Nコード】

N3070B

【作者名】

滾

【あらすじ】

某大国の宇宙ステーションから伝えられたのは“地球最後の日”についてだった。

上 通告と平穩

アメリカの宇宙ステーションから全世界に向けて放たれた一通のメールは、全世界を震撼させる威力を持っていた。

『残り二日で地球は隕石の墜落によって終わる』

なんでも、本来月の向こうを通るはずの彗星が、遠くの惑星の爆発に伴って飛来した破片に衝突して方向を変え、地球に向かっていていると言う。

その宇宙ステーションの今までの功績は素晴らしく、誰もその話を疑う事もなかった。

あと一週間を待たずに今年を終えるのに・・・。

各国の大名達はどうするかを迷った。

国民に知らせるべきなのか、それとも黙っておくべきなのか。迷ったが、答えは中々早く出た。

世界に終わりを告げよう。

これは、全世界満場一致で決まった事だった。
最後だ。

どうせ最後なら、教えてやろう。

そうして、今俺はその内容をニュースで見ると至っているわけだ。
いいのか？と、俺は思った。

こんな事を世界に放送してしまつて、暴動等は怒らないのだろうか？
そんな不安もあったが、何故だろう。世界は何時も通り回っていた。

決算売り尽くし！と、銘を打って、スーパーやらデパートで安売りが始まったりもした。

決算も何も、もはや金になんの意味も無いのに。

それでも、働く人は働いていた。

俺が見ていたニュース番組の中で、女性キャスターがこんな事を言っていた。

『私はこの仕事をしていて、今までとても楽しく過ごしてきました。今、私がここで皆さんに最後までニュースをお伝えすることに、私は一切の悔いを持っていません』

TVの中で、拍手が起こった。

俺も、拍手していた。

街でも、同じような事が起こっていた。

バス、タクシー、電車、新幹線は無料で走り、出来る限り誰をも会いたい人に合わせようとした。

TVでは芸能人が全員集合し、最後の時までパフォーマンスをやり続ける事を誓った。

お笑い芸人が、歌手が、マジシャンが、凡そ考え付く全ての人達がTVの中に集合した。

ああ、と、俺はTVを見ながら泣いた。

そして思った。

無駄じゃなかった、と。

今まで、俺達が無気なくでも生きていた事は、全く無駄じゃなかった。

TVに写る芸能人達は、これまでになく輝いて見えた。

『会いたい人に会って下さい。私達はここで、最後まで全てをやります』

TVの中で、演歌界の大物歌手がそんな事をいった。

そうだ。

誰か、誰かの所へいこう。そう思った。

親、親は何をしているだろう？

俺はすぐに電話を掛けた。

案外スンナリと、電話はつながった。

『もしもし?』

電話に出たのは母だった。

俺は涙を堪えながら、

「大丈夫か?」と言った。

『賢治かい?大丈夫って何がね?大丈夫よ。アンタは?』

「ああ、大丈夫だよ」

涙を堪えたいのだが、いかんせん、流れ出るものはもうどうしようもない。

『終わってまうってねえ・・・』

電話の向こうで、母が言った。

「終わっちゃうな・・・」

俺も、答えた。

『母さんねえ、アンタを産んで良かったと思つとるよ』

母は言ってくれた。

俺の目から、生まれてこの方流した涙より、もっと多いであろう涙が流れた。

「俺も・・・」

俺は無理やり声を絞り出して、

「母さんの息子で・・・、良かったよ・・・」

答えた。

言えた。

『うん・・・、うん・・・』

電話の向こうで、母が泣いているのが解った。

母は最後に、帰ってこなくてもいいから、会いたい人に会え、と俺に言った。

これが母との最後の会話になるのだろうが、俺はいつものように電話を切った。

涙を拭くと、もうそれ以上は流れてこなかった。

会いたい人

電話を見つめて、考える。

いや、考える必要は無かった。本当は心のどこかでさっきから思い出していた。

友人、のフォルダから、一人の女性の名前を探し出す。こっちに越してきた折、分かれてしまった彼女だった。会えるだろうか。

電話に出るだろうか。

考えているうちに、

ブルルルルル・・・

電話が鳴った。

誰だ・・・？

ディスプレイを見る。

と、

今まさに、フォルダ内から探し出した、その彼女からだった。

俺はすぐに電話にでて、

「もしもし」と言った。

少し、声が裏返ってたかも知れない。

『もしもし？』

と、声がした。

間違いなく、あの声だった。

声は言った。

『会えないかな？』と。

『もう、着いてるんだ。そっちに』と。

俺は気づくと、答えていた。

「会おう」

と。

俺は部屋を出ると、バイクに跨って、いつもより賑わっている街の中を駆けて行った。

上 通告と平穩（後書き）

三話完結の話です。

楽しむ話ではありませんが、心が揺れれば幸いです。

中 再開

俺の予想は本当に外れていた。

俺の予想通りなら、街全部がボロボロになるまで壊されて、そこらじゅうで人が殺しあっているはずだった。

が、寧ろ街は平和そのもので、最後だからみんなで騒ごうぜ、見たいなムードで溢れかえっている。

いかに自分が漫画、映画に影響されていたかが身にしみて、少し恥ずかしくなった。

もはや全く意味の無くなった信号を無視して、駅まで奔る。

この道も、この行きと帰りの二回しか見れないのか、と、少し泣きそうになる。

が、何とか堪えて前を見直す。と、もう駅が見えてきた。

俺は賑わう人達を轢かないように気をつけながら、それでもスピードを上げつつ俺は駅へと急いだ。

やはり駅とあってか、人の通りは多い。

その中から、彼女の姿を見つけようとする。

プルルル プルルル

不意に、ポケットの中に入れておいた携帯が鳴った。

急い出して、耳に当てる。

「もしもし？」

『あ、もしもし？こっち、見えてる？私もう見つけてるんだけど』

「え？あ、どっち？」

『こっちこっち。右、かな？右の方手え振ってるよ』

言われるがままに、右を向く。

少し目を見張って、それらしい姿を探してみる。

が、皆待ち合わせをしているのだろうか。何人かの人が手を上げていた。

「え、どこ？悪い、もう一回教えて」

『だから、こっちだつて』

「だからどっちだよ？」

『だから』

と、何故か回線が切れた。

「あ、え？もしもし？もしもし！？」

うるたえて携帯に叫んでみるが、

ツーツーツー……

切れていた。

「あれ？おかしいな」

と、ディスプレイを見ていると、

「だーれだ？」

目をふさがれた。

「さ、里美……？」

答えると、「大正解！！」の言葉と共に俺の視界は開けた。急いで振り返る。

「久しぶりだね」と笑う里美は、分かれたときより少しだけ、少しだけ、大人っぽくなっていた。

バイクの後ろに里美を乗せて帰ってきた。

途中、里美が色々話しかけてきたが、何故か上手く答えられず、俺は聞こえないふりをしていた。

「入れよ」

部屋の鍵を開けて、里美を中に入れる。

別にこんなこと、付き合ってる時は普通だったのに、何故か知らないけども気恥ずかしかった。

「お邪魔しま〜す」

地球最後の日の一日前だと言うのに、律儀に靴を脱いであがってい

く。

だから仕方なく、俺も靴を脱いで部屋に入った。

「あ、部屋の中は綺麗だね」

「そうか？」

「付き合つてるときも部屋綺麗だったもんね。私一回彼氏の部屋掃除してみたかったのに、ケンちゃんの部屋綺麗だったから掃除できなかったし」

そうだったか？と、俺はクッションの上に腰掛けた。

その隣にクッションを置いて、そこに里美を座らせる。

「・・・・・・・・・・」

別に話す事も思い浮かばず、俺は黙ったまま壁に掛けてある時計を見た。

こうしている間にも、時計の秒針は一秒一秒進んでいる。

時が進むにつれて、残された時間は減っていく。

何かそれがおかしく思えて、俺は一人少し笑った。

それを不振そうな顔で里美が見ていたが、構わず俺は笑っていた。

「ねえ」と、口火を切ったのは里美だった。

「ねえ、私と別れたあと、誰かと付き合った？」

「・・・・・・・・いや」

そういえばあれ以来、誰とも付き合っていないかった。

別に女好き、というわけじゃなかったが、それまでは女とはそこそこ付き合ってきていたのに。

「そっか・・・・・・・・」

と頷いた里美は、少し複雑そうな顔をした。

「私はね、付き合ったよ」

「・・・・・・・・そっか」

何故か少し胸が痛くなつて、俺は顔を顰めた。

里美が付き合っていたと知ったからだろうか。

もしくは、里美と別れてしまったからだろうか。

ああ、両方かも知れない。

ともかく、胸が痛かった。

「そっか・・・」と俺は言った。

「そっか・・・」と。

それだけしか、言葉が出てこなかった。

「けどね」と、里美が言った。

「すぐに別れちゃったんだ。一週間くらいで」

「・・・何で？」

「何でだろうね？」

里美は悪戯っぽく笑った。

「何でだろうね？」と。

「ああ・・・、何でだろうな・・・」

呟いて眺めた空は、日が暮れて少し暗くなっていた。

中 再開（後書き）

少し展開が速いです。

下 一分の猶予

「街に出よう」

そう言ったのは里美だった。しかも朝早く。

里美は結局俺の部屋に泊まっていた。かと言って何もなく、本当に何もなく夜を明かした。

俺は床で眠るハメになり、起きたら体中が痛かった。が、里美のテーションでは乗らないと後が怖そうだった。

まあ、“後”があるのかどうかは解らないが。

服を着替えて、俺は里美と一緒に外に出た。里美は持ってきていた服を着ていた。

里美の服の感じは、俺と付き合っている頃とやはり少し違っていた。俺はどうだろう、と、そんな事が少し気になる。

バイクで行こうと俺は提案した。が、会話が間々成らないから、と里美が却下した。ものの一秒の却下だった。

街を里美と二人で歩いた。昨日はバイクだったから、昨日とは違う感じで少し恥ずかしかった。

里美にそれを気取られないように歩いた。

里美は楽しそうにしていた。そう振舞っていたのかもしれないが、楽しそうではあった。

俺も案外楽しんでいたと思う。

“普通”に服屋に入り、「服を今更買っても意味が無い」等という会話をしていた。

そんな会話だったけど、不思議と空気は重くなることは無かった。その後は“普通”にぶらぶらと街を歩いた。その間、昨日の話を続きが話題に持ち上がった。

「私ね、やっぱりケンちゃんの事が好きだったんだ。だから、その

後も長続きしなかったんだね」

そんな事を、やけにあっさりと言われてしまった。

昨日はあんなにじらした言い方をしていたのに。

「そうか・・・」

俺もそうだったかもしれない。とは、俺は言えなかった。

いや、場の空氣的には、これ以上ないタイミングなのだろう。だけど、それを言う勇氣が無かった。

認めるのが怖いのだろうか。怖いとは何だろうか。そんな事を考えていると、

「ケンちゃんは意気地なしだなあ。相変わらず」

と里美に言われた。

“相変わらず”。

この言葉がやけに頭の中で反芻される。

俺は悔しくて、里美に見られる“相変わらず”を何とか探そうとした。

相変わらず・・・、服は変わっていた。

相変わらず・・・、雰囲気も少し大人びていた。

相変わらず・・・、何だろう・・・？

必死になって里美の“相変わらず”を探したのに、結局見つからなかった。

相変わらずなのは、俺だけだった。

昼になって、俺は昼飯に里美を誘った。誘った、というか、「あそこで昼飯を食べよう」と言っただけなんだけど。

そこは普段じゃ滅多なことじゃないと入れないような、超高級な料理店だった。

今は普段じゃなかったし、滅多なことだったから入れたのだ。

最後だから全財産使い切るつもりで入ったが、店員が「今日は全メニユー無料です」と言った。

最後に客に感謝したい、という店長の計らいらしい。

ああ、男らしいな。と思った。まあ、男じゃないかもしれないが。食べた料理は上手かった。多分。ああ、どうなんだろう。もしかしたら牛丼の方が上手いかもしれない。

里美はナイフとフォークの使い方が上手くなっていた。やっぱり俺だけ“相変わらず”子どもだった。

五時を回った。何が、と聞かれれば、時間が、だ。

正確？に言えば十七時だ。残った時間はあと七時間しかない。

その“後七時間”に、妙に実感が沸かない。

まあ、だからこそその平穏なのだろうと思う。

街には依然として人が溢れていた。その中で、段差を見つけて里美と隣り合って座っている。

何故だろう。その人達の全員の顔が、楽しそうに見える。

中には子ども連れの家族も見える。子どもは母と父に挟まれて無邪気に笑っていた。

あの子は、これからどうなるか解っているのだろうか。“これから”が訪れないことを、知っているのだろうか。

そんな事を考えていると、里美がふとその家族を見ていった。

「いいね」と。

何がいいね、なのか、一瞬わからなかったが、「いいな」と俺は言った。

適当に答えたんじゃない。ちゃんと里美の言いたい事はわかった。

「私、あんな家族が欲しかった」

楽しそうな家族を、羨ましそうな、悲しそうな顔で見つめている。

俺はそんな里美を見ていた。

それに気付いているのかいないのか、里美は家族連れを見たまま続ける。

「でも、もうダメなんだよね。何でだろう・・・、何だろうね・・・」

「
」
どんどん声が湿っぽくなるのを感じる。

答えを求めているわけじゃなさそうだから、俺は黙って聞く。

「私、何かしたかな……。何で、何でこうなのかな……。？」

いよいよ目に涙が溜まっている。俺は溜まらず、里美を抱き寄せた。里美は涙を堪えて、尚も続ける。

「あれかな……。ケンちゃんとは別れちゃったから、バチが当たっちゃったのかな……。そうかな……。そうなのかな……。」
泣き出した里美の頭を撫でてやる。

気付くと、俺は喋っていた。

「それでも」と。

「それでも、いいじゃん」と。

「それでもいいよ。今から、また作ればいい」

自分で言っていてよく解らなかったが、気持ちは伝わったかな、と思う。

「でも、もう時間無いよ……。？」

伝わってなかった。だけど、と補足をする。

「短い間でもさ、覚えてようぜ。俺達が、今から、最後までちゃんと生きて、寄り添ってるって事を」

な？と俺は里美の頭をまた撫でた。

「子どもじゃないよぉ……。」と、里美は笑った。

それでいい。

それでもいい。そう思う。

里美は会わないうちに変わっていた。少しだけど、確実に。

俺は、どうだか解らない。少なくとも、里美よりも“相変わらず”が多かった。

それでもいい。

今まで、じゃなく、“これから”だ。

大事なのかこれから。

今まで積み立てた事が、例え無駄だったとしても、それでいい。またこれから、短くても積み立てればいい。たとえ積み立てられる“モノ”が低くても、それでもそれは必ず“残る”。

全ては終わったとしても、それは“残る”から。
最後まで、寄り添って。

今から、と、俺達は“最後”を待った。

二十三時五十五分だ。

“残り”あと五分。それでも、俺達は積み立てた。

もう有り得ない“これから”を語り合い、ちゃんと証を残した。

だから、俺に不安は無かった。恐らく、里美にも。

周りを見回す。いつの間にかあれだけ居た人は居なくなっていた。

残されたのは俺と里美と、最後を告げる時計だけ。

「里美・・・」

俺は里美にこちらを向かせた。

俺の意図はスグに里美に伝わったらしい。

里美は静かに、瞳を閉じた。

時計が静かに、時間を刻む。

俺はゆっくり、里美の唇に俺を重ねた。

そのまま、思う。

俺さ、と。

俺、不安だったんだ。多分。ずっと。

成長してるお前見て、不安だったんだ。でも、そんなの関係なかつ

た。お前はお前で、俺は俺だった。

なあ、そうだろ。これでいいんだよな。

そんな事を、ただ頭の中で里美に語りかける。

ああ、ちゃんと伝わったかな。ああ、伝わっただろうな。きっと。

大丈夫だ。

時計は静かに時を刻む。

残り一分。

ベルが鳴り、最後を告げる。

もう“終わる”。もう時間だ。

ああ、と思う。

それでも、と。

神様、最後にどうか、あと一分だけの、猶予を

時計の針が、重なって、“終わり”が告げられて

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

俺は寝ぼけ眼で時計の針を止めた。

何だろう。凄い“夢”を見ていた。

俺が元カノと最後の日に何かを確かめあう夢だった。

残念ながら世界は終わりを告げていないし、こうして日常はこれからも続きそうだ。

ただ、ただ、と思う。

どうせあんな夢を見たんだ。元カノに、久しぶりに連絡してみてもいいかな。と。

それにしても、どれにしても、
ともかく神様。

俺に、後一分だけ、猶予を

下 一分の猶予（後書き）

最終話です。

オチがついてしまいましたが、楽しんで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3070b/>

あと一分の猶予を

2010年10月21日20時21分発行